

ハンサム・ジャック：エトセトラ

かの有名な
ハンサム・ジャック（とあと一名）による
パフォーマンス・ピースと
その幕間

彼のアクトは、トランプや指輪、お札といったなんの変哲も無い道具を使いながらも繰り広げられる類い稀なき奇跡の創世、当意即妙な応対を見せる、洗練されたスタイルの結晶である。それらを並外れた素晴らしさで体現しており、既存のあらゆるものと比しても革新的でオリジナリティがあふれた存在だ。

本書では無知な者でも少し練習すれば完璧に身につけられるように、わかりやすく十全でそして正確なかたちで、ギミック、ダミー、手法、企み、技術、ミステイク、戦略、戦術、心理学、最高のマジシャンによるスライ드가詳細に解説されている。加えて160を超える写実的イラストレーションも収録した。

著

ハンサム・ジャック

注釈

ジョン・ロヴィック

翻訳

谷口和巖 滝沢敦

イラスト

ロビン・ファクア & ジョン・ロヴィック

The Performance Piece & Divertissements of the famous Handsome Jack, etc.

Written by Handsome Jack. Annotated by John Lovick.

Illustrated by Robin Fuqua & John Lovick

謝辞

ベン・ジレットとテラーに感謝の意を表したい。彼らにイントロダクションを書いてもらったのは象徴的であり（そして文字通り）夢が叶ったと言える。彼らに加えて、S・モーガンスターン、ロドリック・ジェインズ、ドナルド・カウフマンにはインスピレーションを与えてくれたことを、ロビン・フークアには美しい挿絵を描いてくれたことを、ロブ・ザブレッキーには写真を撮ってくれたことと下書きにアドバイスをくれたことを、デレク・デルガウディオには本書で解説しているルーティンの多くに改案を出してくれたことを、ガブ・ファユリには本のデザインをしてくれた事と出版の許可をくれたことを、デビッド・バックには美しい表紙を描いてくれたことを、マイク・キャベニーには彼が発表しているマジックをここに書くことを許してくれたことを、スティーブン・ミンチとタイラー・ウィルソンには一流の編集作業をしてくれたことを、マイク・ヴァンスとジェイソン・イングランドには周到な文章校正をしてくれたことを、デレク・ヒューズには頼れる相手でいてくれたことを、クリステン・ランバートには鋭い指摘をしてくれたことを、サイモン・コロネルとマラーシ・ヒューム、デビッド・リーガルには書き方のアドバイスをくれたことを、アジ・ウィンドとグレン・カインにはデザインの仕方を教えてくれたことと悪いデザインを使いそうになった私を止めてくれたことを、ジェイミー・イアン・スイスには彼の深い洞察力と激励に、ビル・ハーズには彼の寛大さに、アンソニー・デイビスにはアドバイスをくれたことを（そのアドバイスは完璧に無視したが、それを後悔する日が来ないことを願う）、キャリー・ウィータにはキャリーでいてくれたことを、ムーン・ザッパには精神的な支えでいてくれたことに、そのすべてに感謝を述べたい。

最後に、私のレパトリーに入っているマジックの原案を考えた数えきれないほどのマジシャン全員に感謝を述べたい。この本に書いてあるマジックは全て彼らの創作の上に成り立っており、彼らの名前は本のそこかしこに出てくる。是非探してもらいたい。

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, including photocopy, recording or any information storage and retrieval system now known or to be invented, without permission in writing from the publishers.

Originally published in the United States by Squash Publishing

Copyright © John Lovick 2018. All Rights Reserved.

Copyright © Realize Your Magic, LTD.

不良少年たちへ
君らは私たち自身だ

C O N T E N T S

前書き ● 6
序文 ● 11
イントロダクション ● 13

第 1 幕 : オープナー

ボトルを取り出せ！ ● 19
ハンサム・ジャック・ロト ● 27
今日は君の誕生日 ● 33
100 番目のビル・チェンジ ● 41

幕 間 1

パフォーマンスというパズルにおけるペルソナとその他の要素 ● 51

第 2 幕 : センターピース

テンカード・レッド・ローバー ● 63
私の指輪！ ● 73
聖書で浸礼 ● 83
恋するハンサム ● 93
ハンサム大統領 ● 103
粋な盗人 ● 109
聖ジャック ● 127
片手はポケットに ● 137
心を読む夢 ● 145
フーディーニを超えろ！ ● 153
リパレーション ● 161
リパレーション再び ● 175

幕 間 2

台本作りとそれに関わる大切なこと ● 189

第 3 幕 : クローザー

大恐惶の小さな家 ● 201
ヴェインファビュレーション ● 209
アイズ・ワイド・シャット ● 227
ミューティレーション&レストレーション ● 235

前書き

ジョン・ロヴィック

私はこの本が出版されなければ良いのに、と強く願っている。あなたがこれを読んで
いるということは、その願いは叶わなかったということだ。

私は何年もの間、自分の作品を本やDVDにするというオファーを断ってきた。一つには、お気に入りのマジックはいくつかあるとは言え、一冊にまとめられるほど興味を持ってもらえる量の作品は自分にはないと思ってきたからだ。また、作品のいくつかは今でも時折演じるし、それを他人が演じているのを見るのは気が進まないからでもある。しかし二人の偉大な作家がそれぞれ言っているように、「すべての事情が私を追い立て」…そして「金が必要になった」のだ。

90年代に私はあるテレビプロダクションで、エグゼクティブ・プロデューサーのアシスタントをしていた。彼女は当時の私より5歳ほど若く、高校中退という経歴だった。反対に私は博士号を持っていたので、私の方が正しい道を進んでいたのは明らかだった。

当時はプロのマジシャンになろうとは思っていなかったが、マジック自体は真面目な趣味として真剣に取り組んでいた。そんなとき、ペン&テラーが私に連絡を取ってきたのだ（彼らと面識は無かったが、メールアドレスは交換していた）。マジックを覚えたがっている俳優兼モデルの友人がいるのだが、彼のアクトを作る手伝いをしてくれないか、ということだった。ロスにいる多くのマジシャンの中から、彼らが私を選んでくれたことに有頂天になった。もし彼らに会うときは、なぜ私を選んだのか尋ねなければ、と思った。マジックを教えた経験はなかったが、コンサルティングの仕事はしていたし、その男に会うことで私に失うものは何もなかった。

その友人というのが、お察しの通りハンサム・ジャックで、我々はハリウッドのカフェで出会った。彼は自分の人生全体がショーだと思っており、他人は観客として目の前に現れたり消えたりするものだと思認識しているような人間に見えた（長く付き合うにつれ、彼には二種類の面があることが分かった。尊大な面と、ひどく尊大な面だ）。彼は私が挨拶を言い終わらないうちに、息もつかせないような勢いで自分の来たるべきキャリアの展望を語り、そのために「派手で印

象的かつ、そこまで難しくないがマジシャンも騙し、クローズアップでできてステージでも見栄えの良いマジック」が欲しいと言ってきた。さらに続けて「コメディ要素があるスタンダップのアク트가大半になるだろうが、テレビでも見栄えのするのが必要だ。しかし本当に強烈で印象的な、女性が好みそうな…そうだなスライハンドやメンタリズムが欲しいし、笑えるが奥が深く、男どもも面白いと思うのがいい」。そしてついに、お願いというよりは決定事項の宣言に近かったが、私が協力して「強烈で品があり、素晴らしく、それなりに簡単なマジック」を教えることになった。私はしづしづながら、彼のアクト作りに協力することになった。

すぐ分かったことだが、ハンサム・ジャックがマジックをしている様はお世辞にも「白鳥が水面をすべる」ようにはいかず、どちらかと言うと「エド・ウッドが映画を撮っている」ようだった。マジックの才能はかけらも無く、指先も不器用でマジックの基本的な知識もなく、タイミングを計ったりペースをつかむこともできず、演技スタイルは（今でもそうだが）大げさで鈍いものだ。

数週間たつと、彼はマジック・キャッスルで演技がしたいと言い出した。私は、演技どころかメンバーになるまでの腕前にもなっていないと説明した。一歩ずつ進もう、と。メンバーになるためのオーディションには申し込んでもいいが、演技のオーディションに出るかどうかは10年ぐらい経ってから相談しようと言った。

それから何ヶ月かかけてオーディションのためのリハーサルを重ね、ついに彼は最後まで道具を一つも落とさずいられるようにまでなった。私は彼に、最初のチャレンジでは受からないこともある、と言った。オーディションの最中にエンターティメント・ディレクターであるロン・ウィルソンが（今まで一度もオーディションになんか来なかったにも関わらず）入ってきた。そのとき、ちょうどガイ・ホリングワースがマジック・キャッスル初出演の初日を終えて、クビになったところだったのだ（この話はまた別の機会にするとしよう）。ウィルソンは、翌日までにホリングワースの替わりを見つける必要があった。彼はハンサム・ジャックの演技を見て「特別な何か」を感じると評し、その週の残り出演させたのだ。それから彼はキャッスルに継続的に出演するようになる。

ハンサム・ジャックは一週間の出演のたびに新しいアクトをしたがった。すでにあるアクトもつかえずにははできないくせに、私には常に新しいマジックを作らせた。ポジティブに考えれば、彼をキャッスル出演で忙しくさせておけば、外の「現実世界」への被害は押さえられると思ったのも事実だ。

だが私は間違っていた。

半年もしないうちに、彼はコーポレート・ショーやハリウッドのパーティーに出演するようになった。全くいららする事だが、一般の観客は良いものと悪いものとの区別がつかないのだ。下手なマジシャンを見ても、たまたまマジックに引っかかったら、相手を良いマジシャンだと思ひ込むものだ。少なくとも業界の人間は彼のレベルを分かっている、と思うのがせめてもの慰めだった。

ここでも私は間違っていた。

1年経たないうちに、彼はマジック・コンベンションに招待されたのだ。さらにアカデミー・オブ・マジカルアーツが主催するパーラー・マジシャン・オブ・ザ・イヤーにも毎年ノミネートされる

ようにもなる。彼が多忙になったため、私もテレビ・プロデューサーの仕事辞め、フルタイムで彼のために働くようになった。

しかし彼のパフォーマンスの質の低さは変わらず、私はそこに関わっているということが恥ずかしかつた。さらにひどいのは、マジシャンの中には彼と私が同一人物だと思っている人が出始めたことだ。彼が演じるマジックは、私が以前雑誌やレクチャー・ノートとして発表していたため、知っているマジシャンも多かった。だから彼が私だと思ひ込んだわけだ。私は全くそう思わないが、彼と私は似ているという人がいたことで、事態はさらにややこしくなった。ハンサム・ジャックのステージ・ペルソナとマジシャンとして欠落している部分に私の主張は反映されておらず、それだけでなく私が考案したマジック自体も私の主張が悪い方向へ反映されていた。しかし年月が経つにつれ、彼ほど下手なパフォーマーが演じていても、マジック自体は機能しているということが分かってきた。私がタネを分らないようなマジックを考案し、台本と構成を練り上げてさえいれば、パフォーマンスがどれだけ悪いものであっても、観客は楽しんでくれる。私の作品たちがハンサム・ジャックを支えていることが分かったとき、自分の創作物を恥じることをやめた。私は自分の作品を誇りに思うようになった。我々はパートナーを続けることになり、彼は変わらず前向きに失敗し続けていた。

5年ほど時間を飛ばそう。あるときミスター・リザードが私に電話をしてきた（彼は私のマネージャーだが、もちろん本名ではない。これは内輪受けのギャグだ。彼が私をミスター・ウィザードと呼ぶので、私は彼をミスター・リザードと呼んでいる）。良いニュースと悪いニュースがある、と言うのだ。私は良いニュースから聞きたい、と言った。すると彼は、担当していた映画のコンサルティングの仕事から私が降ろされると伝えてきた。

「なんだって！？ 良いニュースからと言ったじゃないか」

「これが良い方のニュースさ。あの映画、嫌ってただろ」

「そうだけど、ギャラは欲しいよ。じゃあ悪い方はなんだい」

「Facebook で見たんだが、ハンサム・ジャックが彼のマジックをすべて解説した本を出らしいよ」

それは私も初耳だったが、もちろん「彼のマジック」とはすべて私が彼のために考案したものだ。私は彼に電話をしたが、彼はなぜ私が怒っているのか理解できないようで、原稿料の5パーセントを支払う、とまで言ってきた。私はその申し出を断り、パートナーシップは終わりだと告げた。どのみち、マジックから足を洗う口実を探していたのだ。本当のショー・ビジネスの世界に戻り、テレビ業界で稼いだかった。実際ハンサム・ジャックをプロデュースするために培ったマジック考案や台本作成、そしてディレティングのスキルをもって、アソシエイト・プロデューサーのプロダクション・アシスタントの仕事につくことができた。

本の出版を差し止めるため、私は彼を告訴した。そして勝訴した。最短の時間で決定的な判決を得ることができた（解決までに要したのはほんの6年だった）。自分の作品を公開する意志は全くなかったので、裁判長が最終的な判決を言い渡したときは大喜びだった。だが驚くにはあたらないが、この法廷闘争にかかった費用は莫大なものになっていた。弁護士に費用を支払うために、給料の良い仕事につく必要があった。20年前に一緒に働いていたプロ

デューサーは、いまやエミー賞を獲るほどになっていた。彼女の会社は急速に成長していたので、もう一度彼女のもとで働けないか、打診してみた。彼女の返事は「また連絡する」だった。

また破産を避けるため、ファイナンシャル・アドバイザーとも会った。彼女の答えは、収入を上げるために早急に手を打たねばならない、だった。「マジックの本はどうでしょう？ 考えたマジックをすべて解説した本を出版して、他のマジシャンに売ったらどうでしょうか」 そうなのだ。出版を差し止めるための費用を捻出するために、その本を出版したらどうかと彼女は提案するのだ。

仮に自分の作品を解説した本を私が出版したいと思ったとしても、物事はそう単純ではない。権利関係がややこしいのだ。裁判長が言うには、手順自体は私のものだし、文書のコントロール権も私にある。しかし実際に自分が書いたわけではないので、著者であるとは主張できない。さらにもしこれを出版するなら、変更を一切行わずにそのままの形で出す必要がある。法的に、削ったり変更することは一文たりとも禁じられているのだ（たまらないことに、同じ事はタイトルにも言える）。しかし、私の弁護士が抜け穴を見つけた。文章を変えることはできないが、脚注を（またはこの前書きを）加えることは禁じられていない。

つまり、私はそれをしたのだ。ハンサム・ジャックの文章全体に脚注を追加した。なぜならば、どれだけの数を実演したとしても、彼はそれを考案した人間ほど中身を理解することはできないからだ。脚注において私は間違いを正し、クレジットを付記し、ハンサム・ジャックが理解していない内容を明確にし、それだけでなくエッセイも勢いで2つ書いてしまった。もしこの本を出版せざるを得なくなっても、私の弁護士が正しければ、脚注を加えたことで訴えられることはない。

おっと！ ちょうど今、昔のボス（例のプロデューサー）から返事が来た。彼女の会社でアシスタントのインターンを募集しているそうだ。早速、明日面接に行くとしよう。うまくいけば、出版をしなくてもすむはずだ。幸運を祈っていてくれ。

ロサンゼルスにて

2016年7月5日

序文

ハンサム・ジャック

君が何を考えているか、分かっているよ。忙しいモデル業のどこに、マジックの本を書く時間があるのかって聞きたいんだろう？ 時間は作るものさ。

だが、簡単なことじゃない。ここに収録した作品は、長年演じ続け、実験をし、発明し続けてきたものたちだ。そういう作業の上澄みを集め、言葉と図にまとめることは難しかったが、何とかしてみせた。読んだら興奮すること間違いなしだ。

この本に収録されているのは、僕がプロとしてスタンダップで演じてきたレパトリーのすべてだ。この20年の間、コーポレート・ショーやプライベート・パーティー、そしてマジック・キャスルで演じてきたすべてのアクトと言って良いだろう。僕の生活を支えてくれ、12年間連続でパーラーマジシャン・オブ・ザ・イヤーのノミネートを勝ち取ってくれたものたちだ。なぜそれを公開してしまうのかって？ 僕の成功を支えてくれた人たち（特にある人物）に感謝の気持ちを表すためだ。

僕がトップに上り詰めるまでには多くの人たちがそれぞれの形で助けてくれた。まず思い浮かぶのは、僕がモデルを辞めようか迷っているとこぼしたときに「マジシャンはモテるぞ」と言ってくれたカメラマンだ。非常にそそられる考えだったが、僕の知る限り、成功したマジシャンの中で本当に男性として魅力のある人物はいなかった。もしかしたら僕の整ったルックスが成功を妨げる要因になるかも知れない、という疑念があった。だからペンとテラーに、僕のように魅力的な容姿の人物でもマジックを学んで成功できるかどうか尋ねたのだ。彼らは問題ないだろうと言い、僕を手伝ってくれる人物まで紹介してくれた（今思えば当然の話だが、数年後に聞いた話によるとそのカメラマンは、マジシャンではなく「ミュージシャンはモテるぞ」と言ったらいい。が、そのときはもう音楽を学ぶには手遅れだった）。

ペンとテラーが引き合わせてくれたのが、ロバート・クラムの絵がそのまま動いているような、ジョン・ロヴィックという男だった。なぜロサンゼルスにたくさんいるマジシャンの中から、ペンとテラーが演技経験もない本の虫を勧めてくれたのか分からなかった。だが、僕は彼らを信頼し

ていたし、彼らには確かに目算があったのだ。ロヴィックは素晴らしい選択だった。彼と仕事をし、彼の作品を演じることで僕のマジシャンとしてのレベルは否が応にも上がっていった。彼の作品が凡百だったおかげで、その不足を埋めるために僕自身がポテンシャルを最大限発揮せざるを得なかったのだ。持てる技術、能力、人格のすべてを総動員する方法を身につけ、常に最高の状態で演じた。いわば足首におもりをつけたまま走っている状態なのだから、これにはかなり鍛えられた。マジックを本当に輝かせるものはトリックではなく、パフォーマンスにおけるダイナミズムだということがよく理解できた。

ロヴィックはずっと自分の作品をまとめて出版したがっていたが、自分では書きたがらなかった。そこで僕が今日のようなマジシャンになる助けをしてくれた感謝の気持ちを込めて、この本を書いたのだ。さらに言えば、この本を書けるのは僕以外にはいなかっただろう。なぜならば、マジックを何百回も実演するまでは、そのニュアンスや隠された意味を深く詳細なレベルで理解することが不可能だからだ…例えそれが考案した本人だとしても。僕はロヴィックを驚かせるために、自分のエゴを捨ててこの本を書いた。彼はまだこのことを知らないが、出版された本を彼に渡したときの反応を見るのが楽しみだ。原稿料のいくらかを彼に払ってもいいとさえ思っている。

つまり、このそこまで凄くないマジックを集めた本が存在するのは、このようなわけからだ。この本からぜひ閃きを得てほしい。気前よく公開するのだから。礼はいらない。書かれているトリックに面白みを感じないことがあるかも知れないが、僕のように情熱的で人を惹きつける魅力的なパフォーマーの手に掛かれれば、命が吹き込まれるのだということを忘れないでほしい。解説してあるトリックはそこまで強烈ではないが、だからこそあなたがマジシャンとして成長できるのだから、喜んでほしい。

不思議なトリックを見つけることは忘れてほしい。より良いパフォーマーになるのだ。

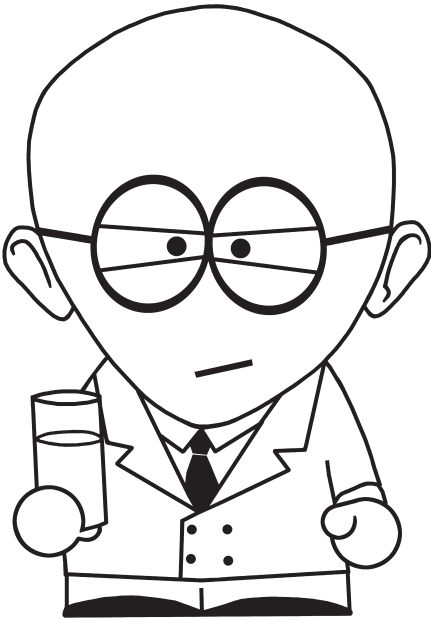
カリフォルニア州マリブにて

2009年3月7日

第1幕



オープナー



ボトルを取り出せ！

Bottle? Rock It!

カードを1枚思い浮かべて。好きなトランプを。スペードのA以外でね。思い浮かべた？ それに意識を集中して。ハートのジャックかな？ 当たった！ どうやったかって？ まあ、それだけ僕が優秀なんだよ。それだけじゃない。24時間後にもう一度やったとして、君が別のカードを思い浮かべても、当てられるんだ！ 嘘だと思っているようだが、本当さ。このページは神経に感応する変幻自在のインクで印刷されているからね。これは今後売り出すと思っているが、可能性は無限大だ。しかし欠点の一つあって…知能の高い読者にしか効かないことだ。

これは強力なトリックだが、しかしなぜボトル・プロダクションの章の始めにカードを使ったメンタリズムを紹介したのか。それはショーのオープニングについて話しかつたからだ。何度も聞いたことだと思うが、マジックショーで最初に行う現象は、素早く、目立ち、観客の注意をわしづかみにするほど印象的でなくてはならない、とよく言われる。それは間違っていないが、これはあくまで観客がテーブルに座って周囲と会話をしているようなナイトクラブの時代の話だ。テーブルホップなどでは、観客がこれからマジックが始まることを知らない状態で、その中に割って入ることになる場合がほとんどなのだから、笑えて面白いものか、そうでなければすばやく現象が起こるものを見せた方がいい。しかしスタンダップのショー（この本に解説されているマジックはそのような環境での演技を想定している）では、そういったことはほぼ必要ない。大抵の観客は、それを見るために来ているからだ。彼らはこれからどういった事が始まるのか分かっている。マジックを見るのにかかせない興味と注意を少なくとも初めのうちは払ってくれるが、差し出してくれた時間に見合うものをマジシャンが提供できなければ、それらはすぐに無くなってしまっだろう。

僕のスタイルとペースは、普通のマジシャンのそれとは異なる。演技時間は比較的長め（3～10分）で、不思議さが徐々に高まっていくものが多い。どの手順も、数分経つまで最初の現象が起きない。最初にインパクトのある現象が必ずしも必要だとは思っていないが、それ

でも過去 20 年間行ってきたほとんどのスタンダップ・ショーのオープニングでこのボトル・プロダクションを演じたのは、それが理由だ。時間は1分ほどだし、大きな笑いが二カ所で起こり、不思議で強烈な驚きが1回ある。これで観客は目の前のマジシャンが、ただの美男子でなく優れたマジシャンであることを理解するのだ。その状況を作ってしまうと、観客が退屈に感じる心配なしに、長い手順に入ることができる。

しかし冒頭で紹介したメンタリズムとは違い、ボトル・プロダクションは「完全にランダムな感じ」がしてはいけないし、文脈と無関係に演じるべきでもない。もしアルコールが出される会場で大人のために演じるのなら、ワインのボトルを出すだろう。学校で演じるなら、ノンアルコールの何かを出す。また可能なきは、その後のショーと関係のあるボトルにする。

冒頭のメンタリズムが、やり方が全く想像できずにどんなに強烈であったとしても、この章を始めるには不適切である。なぜなら、前後と全く脈絡がないからだ。それよりも、次のようなものの方がふさわしいだろう。

僕は昔から昔ながらのボトル・プロダクションが好きだった¹が、長い間自分のアクトに入れるのは却下してきた。それは田舎のみみたいにジャケットのボタンを留めずにステージに出ることが許せなかったからであり、ボタンを留めた状態でボトルをスチールするのは不可能だと思ってきたからだ。しかしある日、ボタンを留めたままでもボトルをスチールすることができることに気付いた²。この1点だけが、従来の方法と僕の方法との違いだ。ジャケットのボタンを留めたままでもボトルを出す方法を考えたわけだが、これは小さいが大きな違いだ³。これにより、利点がいくつか生じる。一つ目はボトルが「どこからでも持ってきた」ようには見えず、より不思議だということ。二つ目は、ボトルをなるべく早く出す必要がないことだ。ボトルはしっかり隠れたままの状態、完全に自由に動くことができる。横を向いたり手を上げたらジャケットが開いて、ボトルが見えるなんて心配はしなくていい。僕はオープニングでこれを演じるが、実際には3つ目や4つ目の手順で演じたとしても、何の問題もない。

1 「昔から」とは、数年前に私が彼にこれを教えてからの期間を指す。そして、彼の常だが、彼はこれの来歴は全く知らない。そんな「些細なこと」はどうでも良いと思っているからだ。彼の言っているボトル・プロダクションはボブ・リード (Bob Read) がアブラカダブラ誌 (Abracadabra) 1961 年1月号で発表し、有名にしたものだ。これはレモ・インザーニ (Remo Lanzani) がジェン誌 (The Gen) 1958 年2月号で発表したもののバリエーションである。インザーニのハンドリングで演じている人を見たことがないが、一説の価値はある。

なお、もしこの脚注を読んで誰が書いているのだろうかといふかしまれた方は、おそらく私の前書きを読まれていないものと思われるので、いま読むことをお勧めする。そうすれば、この後に続く内容も、意味が分かるようになるだろう。

2 これは事実だ。彼がジャケットのボタンを留めたままボトルをスチールできると「気付いた」のは、ある日私が「なあ、ボタンを留めたままでもボトルはスチールできるのかもね」と言った翌日のことだ。それから私がその方法を考え、彼に教えた。次の脚注も参照されたい。

3 簡単なことではないが、ハンサム・ジャックがこのような腹立たしいことを言っても、私は何も言わないようにしている。彼が何かを「考案」したり「改善」したり「発展」させたとき書いていても、それは私の考案であり改善であり発展であることは知っておいてほしい。ハンサム・ジャックが考案したものと言えば、「彼の」アクトの都合良く修正された来歴くらいである。

